

(様式1)

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」
平成25年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	兵庫県	番号	4
-------	-----	----	---

推進地区名	推進校名	児童生徒数
篠山市	篠山市立篠山東中学校	140

調査研究の内容

1. 推進地域における取組

本県では、全国学力・学習状況調査の結果や学習指導要領の趣旨を踏まえ、基礎的・基本的な知識・技能と、それらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等をバランスよく伸ばすとともに、主体的に学習に取り組む態度を育成する取組を推進してきた。特に小・中学校の系統性を踏まえつつ、言語能力の育成や理数教育を重点的に推進した。

具体的には、言語の能力を育成するために中学校国語科の授業改善を図る教員研修会を実施したり、効果的な言語活動が展開された授業を収録したDVDを作成し、全県的に授業改善を促進した。また、理数教育の充実として、専門性の高い高等学校教員による実技研修会を実施し教員の観察・実験の指導力向上を図るとともに、専門家による特別授業等を実施し、児童生徒の理科への興味・関心を高めてきた。

これらに加えて、小中一貫教育推進コーディネーターの配置により、小学校高学年における教科担任制のさらなる充実を図り、小中学校間で指導内容の系統性を確保したり、指導方法の共有を図ったりする取組を促進してきた。

2. 推進地区における取組

推進地区の篠山市においては、全国学力・学習状況調査で過去5年、全国や県の平均正答率を下回り、言語の能力の育成と学習習慣の定着に課題が見られた。そこで、次の取組を推進した。

- (1)義務教育 9 年間を見通した学力向上を図るためのカリキュラムの研究
 - ・ 小中教科担当者会を開催し、中 1 ギャップを解消し、確かな学力の定着につながる教材の作成
 - ・ 乗り入れ授業のみならず、小中交流会の実施により、指導方法や指導形態の研究
- (2)生活習慣、学習習慣の定着を図るための研究
 - ・ 日常生活と学習効果の関連性を図るため、栄養教諭と連携した食育の授業
 - ・ 家庭学習の教科や習慣化を図るための反転授業(*1)

3 . 推進校における取組

推進校の篠山市立篠山東中学校では、「学力の定着と向上を目指した指導の研究 ~6.5 年生の教材作りを通して『生きる力』を育てる~」という研究テーマのもと、小中学校教員の教科担当者会、相互の授業参観等により指導方法や学習形態の円滑な接続に取組、学力向上に取り組んできた。

- (1)教科担当者会を開催し、国語、算数・数学、外国語活動・英語において、6.5 年生(*2)の教材作りに取り組んだ。その協議の中で、小中学校それぞれの教員が相互のカリキュラムや指導方法を理解し、共通認識をもって学習指導に臨むことができるようになってきた。
- (2)数学と英語において、ある単元の導入部分の映像を事前に DVD により児童生徒が予習をし、授業では発展的な内容を学習する反転授業を行った。児童生徒に「理解させること(インプット)」から、それを「活用し、応用すること(アウトプット)」によって学力が定着していくと考える。その際の「理解させること(インプット)」については、授業に臨むまでの家庭学習での予習を習慣化させることが不可欠である。さらに定着と向上については理解したことを「活用し、応用すること(アウトプット)」によって育まれていく。反転授業をこの「インプット」と「アウトプット」に有効に活用していく。
- (3)乗り入れ授業や小中交流会により、校種間の教え方の違いに児童生徒が戸惑うことがないように、協議した。

* 1 反転授業：基礎基本を家庭で映像教材等の補助教材で予習し、授業では応用課題やディスカッションなどに取り組む授業のこと

* 2 6.5 年生：6 年生から 7 年生(中学校 1 年生)への橋渡しの意味

調査研究の成果

1 . 推進校における取組の成果

(1) 生徒の学習に対する意識の変化

反転授業の実施により、「家である程度理解して授業に臨めたのでわかりやす

かった」「わからないところを繰り返し見られたのがよかった」「短い時間で集中できた」等、予習に対する前向きな姿勢がうかがえるようになってきた。

(2) 教員の意識変化

小中学校が連携して教材やカリキュラムを作成したことで、「他校種の学習内容や指導方法がよく分かった」等、共通理解のもとで児童生徒を指導していくということが意識付けられた。

(3) 中1ギャップの解消

小中交流会後のアンケートでは、「中学校の交流授業は楽しかった」と回答した児童の割合が10割であり、中学校生活の楽しみとして部活動や友達・先輩のことを挙げた児童の割合が7割以上であった。中1ギャップをなくすことが安心して学習に臨むことのできる環境作りにつながると考えられる。

2. 調査研究全体の成果

本県では、学識経験者や教員等からなる「学力向上実践推進委員会」の協力のもと、平成25年度全国学力・学習状況調査結果を分析しまとめた。教科・学年ごとの学力の定着状況については、全国と同程度であるが、小学校、中学校ともに改善傾向が見られた。具体的には、中学校数学は「知識」「活用」とともに、全国より2ポイント以上高く、中学校国語の「活用」は全国より0.4ポイント低いが平成19年度と比較して全国との差は縮まっている。また、小学校については、国語・算数ともに全国より0.2~0.8ポイント高かった。

また、推進校の篠山市立篠山東中学校では反転授業の研究により、「家で一人学びをし、わからないことを学校の授業で質問することができる」「授業で演習の時間が多くとれてよかった」という感想が生徒から聞かれた。さらに、「授業の内容が理解できたか」という設問では、「とても理解できた」が43%、「理解できた」が57%と肯定的な回答が10割であった。

3. 取組の成果の普及

本県では、平成25年度全国学力・学習状況調査の結果の課題を踏まえた学習指導等の改善・充実のポイントをまとめたリーフレットの配付や「学力向上シンポジウム」の開催により、明らかになった課題を解決するための指導上の工夫改善のあり方等について、普及・啓発を図った。

また、篠山市立篠山東中学校の取組を学校のホームページや、篠山市内の学校イントラネットを活用して、各学校に普及啓発を行った。さらに、篠山市学力向上研修会等において、小中連携を生かした学力向上の取組として広く周知した。

今後の課題

確かな学力の確立に向けては、各学校における授業の質が重要であり、平成25年度全国学力・学習状況調査の質問紙調査では、授業の組み立てや学校の指導体制に課

題が見られた。

具体的には、児童生徒が学習の見通しを立てたり、学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れる指導方法の工夫改善や、全国学力・学習状況調査の結果を授業改善へと反映させるPDCAサイクルの確立が課題であり、引き続き指導資料の作成・配付や管理職を含めた教職員研修に取り組んでいく。あわせて、全国学力・学習状況調査の結果から明らかになった課題を踏まえ、小学校では算数、中学校では国語に重点を置き、授業改善を図るための教員研修を県下9地域で開催する。

また、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図るには、反復学習が必要であることから、従前から全県で取り組んでいる10分程度の学習タイムの実施に加え、平成26年度は、地域人材を活用して放課後の補充学習に取り組む市町や学校を支援していく。

今後とも、全国学力・学習状況調査の教科に関する調査及び質問紙調査の結果を詳細に分析し、兵庫の子どもたちの学力の状況の把握に努め、課題の解決を図りながら、確かな学力を育成していく。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」
平成25年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	兵庫県	番号	4
-------	-----	----	---

推進地区名	篠山市
-------	-----

推進地区として実施した取組の内容

1. 重点課題

包括的な学力向上を図るためには、各学校がそれぞれの課題に取り組みながらも、学校間の共通の課題を設定し取り組むことが必要と考える。そこで、当推進地区においては1つの中学校区にある全ての学校において研究を進める。重点的に取り組む学力の課題は「義務教育9年間を見通した学力向上を図るためのカリキュラムの研究」と「生活習慣、学習習慣の定着を図るための研究」とする。

2. 重点課題への取組状況

(1) 義務教育9年間を見通した学力向上を図るためのカリキュラムの研究

義務教育9年間を見通した学力向上を図るため小中教科担当者会を開催した。小学校・中学校のカリキュラムをつなげることを検討・協議することで中1ギャップを解消し、確かな学力の定着につながる6.5年生の教材を作成した。

また、中学校教員が中学校区の小学校へ乗り入れ授業を行うだけでなく、年3回の小中交流会を実施することで指導方法や指導形態の研究を行うことができた。

(2) 生活習慣、学習習慣の定着を図るための研究

確かな学力の定着には、生活習慣や学習習慣の定着が肝要である。生活習慣の基本の一つである食育について、栄養教諭を中心とした授業を行い、日常生活と学習効果の関連性を図る授業を行うことができた。

また、反転授業を用いることにより家庭学習の強化や習慣化を図った。これは、平成25年度全国学力・学習状況調査において、「自分で計画を立てて勉強している」「苦手な教科の勉強を家でしている」といった項目が全国を下回っていることに対して、予習・家庭学習の習慣化につなげることができた。

(3) その他

2月に研究発表会を開催し、市内及び近隣市へも周知した。また、インターネットによる情報提供を行うとともに、市主催の学力向上研修会で取組について紹介し、市内各学校へ広げた。

3. 調査研究の成果の把握・検証

全国学力・学習状況調査結果の結果から予習に取り組んでいる生徒の割合が復習に取り組んでいる生徒に比べて低い課題に対し、予習の習慣化を定着するため、反転授業の研究を進めた。その結果、「家で一人学びをし、わからないことを学校の授業で質問できる」「授業で演習の時間が多くとれてよかった」といった感想や授業の内容をとて理解できた(43%)・理解できた(57%)といった結果であった。こういった、取組を学校のホームページや市内学校イントラネットを活用して各学校への啓発を行うとともに、市学力向上研修会等において小中連携を生かした学力向上の取組として広く周知した。

4. 今後の課題

義務教育9年間を見通した学力向上を図るため小中連携を推進する。児童生徒の心理的な安定を図ることを基本として校種間の連続性を強固なものとするため、小中連携を意識しながら教育活動を行う「縦」の連携と、学校間の交流や情報交換など「横」の連携を組織的・継続的に行い、全ての子どもにとって登校するのが楽しい学校づくりをめざしていく。

そして、小中学校の教職員が義務教育9年間で児童生徒を育てるという意識を持ち、児童生徒の発達段階に即した「教育課程」「情報の共有」「児童生徒の交流」「家庭・地域との連携」等を通して知・徳・体のバランスのとれた力を育むため、市内全小中学校を対象とした指定研究事業を実施する。

また、生活習慣及び学習習慣を定着するため、市独自で学習・生活習慣調査を検討している。全国学力・学習状況調査及び市独自調査により確かな実態をもとにした取組を推進したいと考える。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」
平成25年度委託事業完了報告書

【推進校】

都道府県名	兵庫県	番号	4
-------	-----	----	---

推進校名	篠山市立篠山東中学校
------	------------

推進校として実施した研究内容

1. 重点課題

異校種の教育内容を十分に理解し、それを教材・教具等を使用して教える場合に、習熟一辺倒に頼るのではなく、習得・活用・探究といった学習活動の類型を適切に採用して指導する。

また、小中学校教員の教科担当者会、相互の授業参観等を行うことにより、指導方法や学習形態の円滑な接続に取り組み、学力向上につなげる。

2. 重点課題への取組状況

本年度篠山東中学校では、上記の重点課題への取組として、「学力の定着と向上を目指した指導の研究～6.5年生の教材作りを通して『生きる力』を育てる～」という研究テーマのもと、児童生徒の学力の定着と向上をめざしてきた。そのための推進体制として、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の3つの分野を設定し、その各分野において研究テーマの達成に向けての取り組みを検討し、実践を重ねてきた。

豊かな心	確かな学力	健やかな身体
<ul style="list-style-type: none"> ・ 定期的な連絡会をもち、小中学校間でつながりのある支援のあり方を確立していく。 ・ 道徳の授業研究会を実施し、全領域の教育活動を関連させることで道徳的实践力を高める。 ・ 児童・生徒会活動を通して児童生徒間の交流を活発にし、自主性や社会性を養う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教科担当者会を行い、6.5年生の教材作りに取り組むと同時にカリキュラムの連続性を考察する。 ・ 相互の授業参観や乗り入れ授業、オープンスクール等を行うことで校種や教え方の違いに児童生徒が戸惑うことなく学習に集中できるよう取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 食育・眠育を通して、健全な心身の成長につなげていく。 ・ 自己安全に向けた意識を高めることで、生命の尊厳と安全に対する規律を遵守する姿勢を養う。

「確かな学力」における取組の一つとして、国・数・英の3教科において9年間を見通したカリキュラムを作成し、小学校から中学校への橋渡しの役割をもつ「6.5年生の教材」作りに取り組んだ。そのために小中学校間の教科担当者会を開催し、協議を重ねた。小中それぞれの教員がもう一方の学校のカリキュラムや指導方法を理解し、共通認識をもって学習指導に臨むことで、より効率的で効果的な結果が得られることを図った。また、3教科以外の教科においても、中学校教員が中心となって同様に教材作りに取り組んだ。

特に、数学と英語においては、その教材を使って「反転授業」を行った。「反転授業」とは、ある単元の導入部分の映像を事前にDVDで児童生徒に配布し、予習をさせ、その次の授業からは発展的な内容を学習していくというものである。この「反転授業」の取組では、事前に中学生を対象に授業を行い、小学6年生を対象に公開授業を行った。

それ以外にも、各小学校に中学校教員が乗り入れ授業を行ったり、年3回の小中交流会を開催したりして、校種間の教え方の違いに児童生徒が戸惑うことなく学習に集中できるよう取り組んだ。

「豊かな心」における取組では、まず、小中学校で共通した学習規律を確立した。これまで小中学校で別々の指導だったものを、必要最小限の共通理解を図り、実践することによって児童生徒の授業に対する意識を変えていこうとするものである。

また、先に述べた小中交流会において、小学生の登下校の指導を中学生が行ったり、学校生活について生徒会役員が説明したりと、中学生が小学生に直接関わることで、小学生のもついろいろな不安を取り除こうとした。

「健やかな体」における取組は、「食育や眠育を通して、健全な心身の成長につなげていく」という観点から、栄養教諭を中心に、学年ごとに栄養に関する授業を行い、生徒たちに日常生活と学習効果の関連性を考察させた。また、保護者にも学校給食を体験してもらい、意見交換することによって、より良い給食のあり方を考えた。

保健体育の授業においては、「AEDを全員の生徒が使える」ことを目指し、人の命を自分が救うということから「命の大切さ」を実感させた。また、そうした取組を通して、自己安全に向けた意識を高め、生命の尊厳と安全に対する規律を遵守する姿勢を養うことをめざした。

3. 調査研究の成果の把握・検証

上記の取組の成果の一つとして、生徒の学習に対する意識の変化があげられる。平成25年度の全国学力・学習状況調査の結果では、「自分で計画を立てて勉強している」「苦手な教科の勉強を家でしている」といった項目が全国平均に比べ10ポイント程度下回っていた。予習・復習の割合に関しても、復習の割合が2倍という結果になった。しかし、反転授業を実施した後の生徒の感想には、「家である程度理解して授業に臨めたのでわかりやすかった」「わからないところを繰り返し見られたのが良かった」「短い時間で集中できた」といった肯定的な意見が多く、生徒の家庭学習（特に予習）に対する前向きな姿勢がうかがえた。そして、その単元の理解に関するアンケートも、ほぼ全員の生徒が理解できたと答えた。こういった意識や姿勢を増やしていくことが、学力の定着と向上へとつながると考える。児童生徒に「理解させる（インプット）」ためには、家庭学習における予習の習慣化が不可欠であり、その理解の定着・向上は「活用し、応用する（アウトプット）」ことによって育まれていく。反転授業を有効的に使うことで、それらが効率的に達成されると確信する。

また、今回の取組の過程において、「小学校（中学校）の学習内容や指導方法がよくわ

かった」という感想をもつ教員が多かった。それと同時に、これまで互いの取組をよく理解せずにそれぞれ単独の指導を行ってきたことも痛感した。今回、小中学校が連携して教材やカリキュラムを作成したことで、より一層の共通理解が図られ、その共通理解のもとに児童生徒を指導していくということが改めて意識づけられた。そのことが、今後のより効率的で効果的な結果につながると考える。

その他の成果として、児童生徒の学習や学校生活に対する不安を軽減させることができたと考える。例えば、小中交流会後の小学生のアンケートには全員が中学校の交流授業は楽しかったと回答した。また、楽しみなこととして部活動や友達・先輩のことをあげる児童が7割以上にものぼっている。児童生徒が精神的に安定して学校生活を送り、いわゆる中1ギャップをなくすことで安心して学習に臨める環境を作ることが生徒の学習意欲につながる。学力の定着と向上を目指すにあたっては、知・徳・体をバランスよく育てることが大切であり、心身共に健康であることがその根幹をなすと考える。

いずれの取組においてもまだまだ研究の緒についたばかりであり、今後の継続的な取組が最終的な成果へとつながる。今年度の成果を踏まえつつ、より発展させていくことでさらなる学習効果へとつなげていきたい。

4．今後の課題

先にも述べたように、今年度の取組をより一層継続・発展させていくことが課題である。まずは、小中学校の連携をさらに強化することが大切である。今年度すべての教科・単元にわたって教材やカリキュラム作り、反転授業などに取り組めたわけではない。その数や種類を増やしていくための課題となるのは、それにかかわる教員の数と時間が限られていることである。この点をカバーするためには、各教員が先を見通した実践に取り組むことと、教員間の今年度以上の計画的な協議と実践が必要である。そして、各校にそれらを取りまとめる推進委員を引き続き配置することも必要である。

また、それぞれの取組の効果を検証するために、全国学力・学習状況調査等の具体的な資料や結果を用いて年度ごとに比較検証する協議会または機会を設置し、継続的な分析ができる体制づくりをしていくことも必要になってくる。

いずれにおいても、教員側の惜しみない研究と取組が肝要で、一朝一夕に結果が出るものではないが、児童生徒の学力の定着と向上、ひいては生きる力へとつなげるために、努力を惜しまず小中学校が一体となって取り組んでいきたい。